

「罪人を招かれるイエス」

ルカ5：27-32

(1)

主イエスの召しと選びとはわたしたちの思いや考えをはるかに越えています。

「事実は小説より奇異なり」といわれてきました。100人いれば100人の召しと選びとがあるからです。わたしの知り合いの方は、新潟の大学で学んでいた時、道ばたに落ちていた一枚のトラウトがきっかけで教会に足を運びようになったというのです。

今朝は、ルカ5章27節以下です。

「イエスは出て行き、収税所に座っているしに目を留めた」(27)、「実に淡々と記されています。しかし、この時、しに注がれていた主イエスの熱いまなざしを覚えないうわけにはいきません。

何故、主イエスは、「取税人しに」に熱い視線を向けて、「わたしについて来なさい」と声をかけたのでしょうか。するとしは少しもためらわずに主イエスに従いました。

「し」とは、後に12弟子の一人になった「マタイ」です。彼について知りうることは、職業が「取税人」であり、主イエスに呼び止められた時、「何もかも捨て、立ち上がってイエスに従った」と記されているだけです。それが必要十分ではないかと言わんばかりです。

それにしても、何故、「し」が、あまたあ

る職業の中から、「取税人」という仕事をあえて選んだのか、いえ、選ばざるをえなかったのか——、その経緯も動機も記されておられません。

福音書には、もう一人の有名な「取税人」がいます。御存知「ザアカイ」です。彼は「取税人の頭」でした。いわば総元締めです。彼は日頃から不正な取り立てをして、私腹を肥やしていたようですから、お金に相当執着心の強い人物であったようです。

主イエスの時代、「タヤの地は、ローマ帝国の植民地でありました。しかし、植民地であったのは、その時だけではありません。アッシリア帝国、バビロニア帝国、マケドニア帝国、ペルシャ帝国、メド・ペルシャ帝国、さらにはローマ帝国と、世界史に次々と登場する強大な帝国の支配を受けてきました。

その度に、「くらく」といふのどちからかを優先して選ばねばならないというギリギリの選択を、常に迫られました。

これは、現在の沖縄の事情と似ています。いえ、日本の現状でもあります。

安定しない暮らしが続けば、くらくを守るとうとするのは当然のことです。おそく、「し」も「ザアカイ」も、そうした一人であったようです。彼らが金の亡者になったのは、なりたくなつたというだけではありません、むしろ、そうした時代的背景があつたことと想われます。

ところで、「し」がそれまで主イエスに関す

る知識を得ていたとか、主イエスの説教を聞いていたというとはなかつたようです。

ですから、しじじいになれば思いがけない時に、主イエスとの出会いが与えられたのです。こうした思いがけない出会いの機会は、しじじいならず、わたしたちの人生途上においても、ありえるのです。それが、若い時か、中年か、晩年かは定かではありません。しかし、予期も予測もしない時、主イエスと出会いの機会があることは、わたしたちにも、十分ありえます。人はそれを偶然というかも知れませんが、たとえば、街角を曲がった瞬間、思いがけなく、なつかしい人と出会う時があります。わたしたちの人生を、主イエスが横切られる、そうした瞬間というものがあります。

しかし、ここで、注目すべきは、「取税人しじじい」に、主イエスのほうから近づいて、声を掛けられたことです。

取税人は、周囲の人びとからさげすまれ、きらわれ、人間のクズとまで見下されてきました。その「取税人しじじい」に、敢えて、主イエスは目を留めて、「わたしについてきなさい」と呼び止められたのです。

「兄弟たちよ、あなたがたが召された時のことをよく考えてみなさい。人間的には知恵ある者が多くはなく、力あるものも多くはなく、身分の高い者も多くいません。しかし神は、知者をはずかしめるために、この世の愚かなものを選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選び、有力なものを無力に

するために、この世で身分の低い者や『軽んじられている者』『無きに等しい者』をあえて選ばれたのです。それはどんな人も、神の前で誇ることがないためです」①「コリント1：26-30」。これはまた、主イエスの召しと選びの原則です。立派な正しい人ではなく、「取税人しじじい」を、あえておえらびになりました。何とも不思議なことです。

「あなたの取り出された穴と切り出された舌とを思い見よ」(イザヤ55：1)との御言を、常に心にとめておかねばなりません。

(2)

「取税人」の立場は、ローマ政府の下請けでした。集めた税金は、全てローマ政府のふところに入ります。いわば、ローマのお先棒をかついでいたのです。職業に卑賤・上下の区別はないと言われてきましたが、「取税人」だけは例外でありました。

「取税人」は、通常の税金を取り立てていた上に、さらに陰ながら不正な手段を用いて私腹を肥やしていたのです。当然、人びとから憎まれ、軽蔑されます。蓄積した富は、その代償としての富であります。

「取税人」は、ユダヤ社会では、神殿礼拝にも参加することが許されず、天の御国からも最も縁遠い人間であるかのごとくに見なされていきました。

しかし、どんなに人々から嫌われようが、軽蔑されようが、なりふり構わず金に執着する人はおります。

「金のいわせる巨那樣」という言葉がありました。総理大臣にまで登りつめた「田中角栄」さんは、それをまるで地でいったような人物でした。目白御殿に陳情に来た人たちに、玄関先で「ヨッシヤ」といって百万円の札束を驚つかみにして手渡しました。どんなに言うことを聞かない人物でも、「ロツと考えを変え」という信念を持っていました。しかし、その彼も、ロッキード社から受託収賄を受けたことで、美鴨刑務所入りし、ヘシヤン」になりました。

富を得ようとすればするほど、人であることを否定しなくてはなりません。多くの金を得たいと願う人が、清く・正しく・美しく生きたいと願っても、無理というものです。例外があると云うかもしれませんが、やはり厳密にはありえません。

「人間が、人間として、最も人間らしく生きるにはどうあるべきか」という命題を与えられたとします、その時も、一番大事なものは、「お金」と答えるのでしょうか。お金で苦労してきた人はそう言うかもしれません。しかし、現実にはありえたとしても、やはり、認めたくありません。人の生きる究極の目的も目標も、金儲けにあるなんて、瘦せても酒れても口にしたくもありません。富を手にすることはむずかしいことですが、それよりさらに難しいのは、お金の使い方です。「マモン信者」という言葉があります。お金に依存している人のことです。宝くじで三億円を手こ

た多くの人は、手にした後が難しいといわれてきました。

かなり以前の話ですが、日本基督教団の議長となった「後宮俊夫牧師」は、戦争中は海軍大尉でした。

戦後、真珠の養殖に打込み大成功し、笑いがとまらないほどもつけたといっています。しかし、富を得た絶頂の頃になると、何とも言えない空しさに襲われたといっています。しかし、丁度その頃、小屋が全焼して、真珠の養殖を廃業せざるをえなくなります。丁度その時から近所の教会に通い始めました。

ところが、そうした時、仕事の口が三つ与えられたといえます。一つは、大臣級がもらうほどの8万円の仕事、もう一つは二万円の口、もう一つは、キリスト教の伝道所の主任です。1、給与は3千円。3千円と8万円とでは、20分の1にすぎません。

しかし、後宮さんは、何と口3千円の仕事を選んだということです。おそらくは、戦中・戦後の浮き沈みの激しい時代を経た人ですから、人間の生きがいとは何かを、心底分っていたのではないのでしょうか。

お金・お金・お金と、お金に執着しがちなわたしたちです。「クリスマスそれにつけても金の欲しさや」という川柳があります。お金のことで、いつも煩わされ、囚われている自分гнаさけなくなりそうです。しかし、それでも・・・、損得勘定をしないで、3千円の仕事を運び取ることが出来るとは、なんて素敵

でしようか、人間は神のかたちに創られたのです。そしてその底力が秘められている、いえずうした素晴らしさが奥底に隠されている。すれば人間もまんざら捨てたものではないかもしれません。人の生きる目的は、「蓄財だ」「お金だ」といふことは、余りにも寂しいではありませんか。

(3)

主イエスは、日頃から、人びとに毛嫌いされ、自ら目で見られていた、取税所に座っているしびの孤独な姿に熱い視線を向けました。

彼の周囲に寄り添うような人は一人もおりません。まして、彼に暖かい視線をもって見つめる人物などがいるはずありません。その孤独な彼に主イエスは近寄り、一目彼をご覧になるなり、彼の「生活の座」の全てを見抜かれたようです。

皆さんは、「眼差し」と言うかもしれませんが、しびは主イエスのまなざしと出会った瞬間、激しく心を揺さぶられたと思われるのです。「目は口ほどにものを言う」と言います。おそらく、これまでに会った人の眼差しとは何か、何処か、違う、しびに対する、慈しみ深い、奥深いまなざしで見つめられた瞬間、このお方は信頼できる――、と瞬時に判断したに違いありません。

目から鱗とはいいますが、主イエスと出会った瞬間、しびの手にしてきた富が一瞬にして色あせた瞬間ではなかったでしょうか。「キリストには代えられません。世の宝も、また富

も・・・世の何物も」聖歌428(と)の聖歌があります。富を手にするためなら、プライドもなにもかも捨ててきた彼です。手にした富はその代償でした。しかし、それによって得たものといえば、あまりにもさびしい人生でした。

「マル」の召しは、マタイの章13節以下にも記されています。その中で、「わたしはあわれみを好むが、いけにえは好まない」とはどのような意味か、行って学んで来なさい」と、ホセア書の御言を引用しています。主イエスは、「あわれみを好む」と申されました。「あわれまれた」は「心を痛められた」でもあります。しびのあまりに不運な生涯に深く心を痛められたのです。

「人間失格」という太宰治の小説があります。その英語のタイトルは、「ヒューマン・ロスト」。しびもまた、「ヒューマン・ロスト」の代表的な人物であり、かなりの重症者でした。

しびを見つめる主イエスのまなざしは、まるで、患者に聴診器をあてている医者そのままのものです。さしすめ、主イエスは名医中の名医ではないかと思われまます。

「しび」が召される前に「中風の男のいやし」がありました。主イエスの目には、「中風の男」も、「取税所に座っていたしび」も、見つけるまなざしは同じでありました。

それにしても、アシコに言わずに、単刀直入に「われに従え」とは、なかなか言えるものではありません。

「わたしに聞こえてきなみなさん」との御声を、わたしは20歳時に受止めました。その時から、「父・母・兄弟」の声を後に、従いました。

「主」のまはな申す、「主」のまはな申す。その時は、「主」と思っていたが、後になって、「主だ、主だ、捨てぬべきものがあつた」と気づきました。しかし、「われに従え」との御声をかけていただいた時から今日まで、良きときも、悪き時でも、主イエスに就き従いました。

「わたしに聞こえてきなみなさん」との御声を、わたしは「主」と思っていたが、後になって、「主だ、主だ、捨てぬべきものがあつた」と気づきました。しかし、「われに従え」との御声をかけていただいた時から今日まで、良きときも、悪き時でも、主イエスに就き従いました。

「わたしに聞こえてきなみなさん」との御声を、わたしは「主」と思っていたが、後になって、「主だ、主だ、捨てぬべきものがあつた」と気づきました。しかし、「われに従え」との御声をかけていただいた時から今日まで、良きときも、悪き時でも、主イエスに就き従いました。

それが、例え死と向い合うような時であっても、向こうから、命の光がさしてくるのを待ちます。

「主」に従う道は、いかに喜ばしきかな」との讚美がありますが、従えば従うほど、道なき所に道をもつていくのだと思い還すわたしの生涯です。

人生砂漠とはいいますが、荒れ果てた「荒野」、何も無い「砂漠」で、預言者イザヤは一つの幻を見ました。「荒野と砂漠は楽しみ、荒地は喜び、サフランのよう」に花を咲かせる。「一、」うす紫の「サフラン」の花は人の心を和ませ、その芳香は人の気持ちを静めてくれます。

砂漠にサフランの花を咲かせてくださるといいます。顧みますと、分らないままに、それでも「従え」と申されたお方に、ただ、ただ、従ってきたのですが、従ううちに、何時しか、気が付いてみれば、三浦綾子さんと声をあわせて「道ありき」と声を大にして言えるものにしていただきました。

「するとしじは、何もかも捨て、立ち上がってイエスに従った。そこでしじは、自分の家でイエスのために大ぶるまいをしたが、取税人たちや、ほかの大ぜいの人たちが食卓に着きかけた」(200-200)。

しじはこうした喜びを冷たく非難した人たちは、法律学者、パリサイ人たちです。彼らの非難に対して、イエスは言われました。

「医者が必要とするのは丈夫な者ではありません、いるのは病人です。わたしは自称正し

いと思っっている人を招くためにきたのではありませんが、本心から自分はダメであると思っ
ている人を招き、悔い改めに導くためです
と申しました。

「悔い改め」とは、反省や後悔とは、根本的に違えます。聖書の言う悔い改めとは「方向転換」を意味します。矢印のすべてを神に向けて、新たに生き始めること。神を無視し、キリストを無視して生きてきた生き方から、方向転換してキリストとともに生き始めるのが悔い改めです。方向転換するのに遅すぎるとどうしようはあります。

主イエスと出会い、このように悔い改めて主イエスにしたがうならば、新たな歩みが始まります。

「誰でもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」

今朝、主イエスがわたしたちに求めておられることは、「主イエスにひたすら」という決断ではなごうでしょうか。

「わたしについて来なさい」といわれて、従う決断をした時から、「これ」は、「マタイ」と呼ばれ、12弟子の一人になりました。

富がすべてではない。金で手に入れることのできるものには、ろくなものはない、肝心なものは、富や金では絶対に得られない。

そうと気づいたじじは、全てを捨てて主イエスに従いました。

今朝は、ここにきていただきます。

【共にいります】

父なる神さま、今朝は、收税所にすわっていた「じじ」に目をとめられ、彼を召された箇所を自をとめました。わたしたちにも、同じ慈しみ深い眼差しで目を留めていて下さる主イエスであると信じます。いよいよ、このおかに従うものとならせてくださいませ。主イエスの名により祈ります。「アーメン」。